

14) クリニカル・パス導入と問題点

佐々木 壽英・佐野 宗明
田中 乙雄・梨本 篤
土屋 嘉昭・牧野 春彦 (県立がんセンター)
藪崎 裕・滝井 康公 (新潟病院外科)

クリニカル・パス (CP) の目的は、医療の質の向上と医療プロセスの効率化で、その作成には良質で高いレベルでの医療の標準化を設定することが重要である。当院は1998年4月にCP導入を決定した。1999年10月現在、院内で39のCPが稼働しており、10月1ヶ月で187例に実施している。外科では乳癌手術から開始し、1999年11月26日現在、乳癌137例、胃癌胃全摘術41例、結腸癌切除術14例、定型的食道癌切除術4例、肝癌肝部分切除術1例に使用している。CPは各部門の参加によるチーム医療を促進させる。また、インフォームド・コンセントの充実に役立ち、患者が治療経過を理解でき、満足度も上がっている。今後はバリエーション分析により医療の質の向上に向けて評価を行わなければならない。

CPの実施状況と今後検討すべき問題点について述べた。

15) 新潟県における血液事業の現況

大坂 道敏・阿部 僚一 (新潟県赤十字血液センター)
小島 健一

平成10年度の献血本数は、110,674本で成分献血を中心に前年度より4.4%増加した。一方、供給数は151,372本と4.2%の増加で、県内献血では賄いきれず11.9%を他県より移入し、依然として血液不足の状態にある。

現在では供給血の約40%が照射血で、病院内照射と合わせると、赤血球製剤の約70%、血小板製剤のほぼ100%が照射後の輸血と推定される。照射血の普及により全国で毎年10例余り報告されていたGVHDが、平成10年度には2例と著減した。一方、平成10年度での輸血による肝炎ウイルス感染は、本県ではみられなかったものの全国ではHBV 22例、HCV 7例と増加の傾向にある。主としてウインドウ期に献血された血液が原因となっており、平成11年9月よりHIV、HBV、HCVに対する核酸増幅検査 (NAT) を開始した。

16) 月経随伴性気胸の1切除例

中山 健司・大関 一 (県立新発田病院) (胸部外科)

症例は40歳、女性。既往歴：平成10年5月15日右自然気胸。現病歴：平成11年6月8日より呼吸困難感が出現し、次第に増強するため6月10日当院内科外来を受診した。胸部X線写真にて右自然気胸再発の診断となり手術目的に同日当科入院となった。入院後直ちに胸腔ドレインを挿入し、持続吸引を行ったところair leakは消失した。6月14日に胸部CT写真を撮影したが明らかなbullaは指摘できなかった。6月18日手術を施行した。胸腔鏡下に右胸腔内を観察したが、臓側胸膜上にはbullaを認めなかった。横隔膜を観察すると膈中心に径数mmの窪みを多数認めた。この部をさらに詳細に観察するために開胸手術に移行した。膈中心部は多数の小孔が開いておりメッシュ状になっていた。この部を切除し横隔膜を修復して手術を終了した。

17) 前縦隔海綿状血管腫の一例

青木 賢治・藤田 康雄 (秋田赤十字病院) (心臓血管外科・呼吸器外科)
土田 昌一
西川 祐司 (同 病理)

縦隔原発の血管腫という非常に稀な腫瘍の切除例を経験したので報告する。

症例は26歳の女性で、胸部単純レ線写真上の縦隔陰影の異常が偶然発見された。その後の胸部CTにて前縦隔腫瘍が認められ、腫瘍の局在と発生頻度及び画像診断上の所見から胸腺腫の術前診断にて手術を施行した。腫瘍は、弾性軟で、上大静脈と交通を持っており、術後の病理診断にて海綿状血管腫と判明した。縦隔血管腫は、術前に正診が得られることは少なく、手術によって初めて本症と判明することが多いとされている。

今後は、画像診断による縦隔血管腫の正確な術前診断が期待される。

18) 胸腔鏡下胸部交感神経切除術の経験

吉谷 克雄・氏家 敏巳 (新潟市民病院) (心臓血管外科・呼吸器外科)
篠永 真弓・中沢 聡
金沢 宏
山崎 芳彦 (救急救命センター)

原発性多汗症は原因不明の過度の発汗を来し、社会生